

## 多元的ケアをどのようにつくり，地域につなげていくか

座長：山田 雅子<sup>1)</sup>，大森 純子<sup>2)</sup>

少し先の社会を考えてみる。2025年問題はもう目の前に迫っている。団塊世代が後期高齢者に移行するまで、あと10年を切った。医療ニーズや介護ニーズの増大が見込まれ、サービスの需要と供給のバランス、個人に届けられるサービスの質、居住する地域による格差など、Quality of Life（生活・人生・命の質）に関連する課題は山積みである。このような現実において、長寿を生きることができる社会をつくる努力が続いている。社会の一員として、看護になにができるか。「多元的ケアをどのようにつくり，地域につなげていくか」この問いのもと、4人のシンポジストの実践例から、看護の未来を志向したい。

高齢者の術前・術中・術後を通して一貫したケア提供を行う Managed Care を推進している宇都宮明美氏は、術後の自宅退院にこだわり、術前からフレイルチェックとその改善を行うために、病院の外来において医療機関内外の多職種チームでかかわり、成果を得ていた。がん患者支援の遠隔看護システムを開発している佐藤大介氏は、Tele-nursing などインターネットを看護手段のひとつとして導入し、在宅患者がいつでも・どこにいても同質のケアを受けられるシステムづくりに取り組んでいた。外来で相談しにくい症状もインターネットだからこ

そ、患者-医療者間の情報共有を促進させ、治療効果を高める成果を上げていた。東北地方の慢性心不全看護認定看護師である竹谷洋子氏は、地域社会のニーズにこたえるため、認定看護師の組織をつくり、患者が地域に戻り、その人らしい生活を送ることができる地域包括ケアを実現しようと努力していた。People-Centered Care を核とした病院職員の教育をつかさどる中村めぐみ氏は、がん看護専門看護師として Maggie's Cancer Caring Center の立ち上げに参画し、ケアの場をつくる協働者である市民とともに新たな挑戦をしていた。

4人の看護実践は、それぞれ既存の看護実践の枠組みを超えていた。その共通点は、当事者の力、住民・市民の力、地域・社会の力を引き出す看護に焦点を当てていくことであり、そこには、多元的という要素を含んでいた。人間の日常生活とその営み自体が多面的で多様であることを捉え直すと同時に、人間の営みの集合体である社会の変化を先読みし、発展的に変容させる看護の力と可能性を考え続けることが、われわれの責務であるとの認識に至った。看護が社会の一員として、長寿を生きることができる社会について探求するとき、「多元的ケアをどのようにつくり，地域につなげていくか」問い続けたい。

1) 聖路加国際大学看護学部

2) 東北大学大学院医学系研究科